



21 世紀型日本的経営モデル

おきなわ F B 短信 (20)
(2 分間で読めます。)

平成 21 年 3 月 13 日 (金)

話は大きくなるが、毎日のマスコミ報道を見ていると、一市民としても日本の将来が心配になる。心配してもどうしようがないし、本当は心配する程のことでもないのかもしれない。

約 1 年前、金融人財講座で、高名な経営共創基盤の富山先生に、「日本は大丈夫でしょうか。先生、日本はどうなるんでしょうか。」という趣旨のことを尋ねた気がする。先生は笑っておられた。

今になってみると、「先生、日本はどうすればいいんでしょうか。」と問うべきであった。

今年の 1 月 17 日にも金融人財講座に来ていただいた。その日の富山先生のテーマは「あるべき 21 世紀型日本的経営モデル」であった。

そもそも貨幣経済自体が信用創造の世界、紙幣 1 枚に 1 万円という価値があるというフィクション性、インテリジェンスの過信、心の中の問題であるから金融にはレバレッジがかかり、膨らむ時もあれば、縮む時もある。

金融危機は、本来儲かる筈のない金融取引(資源の分配に有用性がある)に、儲けるために情報の非対称性を人工的に作った結果である。との前置きで、「再生の修羅場から見えてくる日本の課題」、その課題を将来において克服することが、日本の再生であると、21 世紀日本的経営モデルを語られた。

その課題を要約すると、

現在地の確認を行う。本質的な問題は高齢化と人口減少の中で、どう飯を食わすかという問題、それを確認することだ。過去のバブルの再建においても 10 年はかかっている。それは身体に例えると、血管が破れ血液が流れ出したようなもので、血液を注入しても臓器が動かない。今回の危機で実体経済がやられたということは、先ず、根本的問題である過剰債務、特に米国の個人、日本では企業の過剰債務の解消が重要である。中途半端でない解決法とは、債務を金融機関がベアバリューで購入し、残債は政府の介入により完全棒引きを行なう。そうすれば、企業収益、給与、株も上り始め、経済は立直る、小手先では駄目だ。

それは、ガバナンス(責任感)を確立し、将来像を明確化することだ。そのキーポイントは官民を問わず上部構造である人材、特に強固な経営人材

の改革が重要で、改革された経営人材による現場の活性化である。
21世紀的な経済環境、経営環境の不適応に起因するマネジメントの脆弱化は、
今日も多くの企業で続いており、経営者はそれに流されることのない気概
と責任感を持って、本質的な企業価値の向上に向けて、女性や若い人を巻
き込んで企業組織全体を機能させることが出来なければならない。

日本の病理の根源は、日本人と日本社会の国際競争力の低下である。
それは、国、地域、学校、企業、個人のあらゆるレベルで真の構造改革が道
半ばにも至っていないことであり、人的資本、知的資産の再生こそが成
長と格差是正を実現するただ一つの道であることを知るべきである。
政官産学の全てにわたり既得権構造や、組織内外のカベを破壊して人的資本
が自由・公正に競い合い、最適配置される社会構造を再構築することが必要
である。

マネジメントリーダーシップ

マネジメントにゴールはなく、環境は変化しつづける、しかしその基本原則
は古今東西変わらない。

カネの論理（財務）とヒトの論理（事業）の正反合一をなしとげ、現実と理
念の相克を超えて、企業価値を高める、哲学を持った人材の再生が待たれる。

既存の経済がクラッシュする時にイノベーションが発生するものだ。

今回の金融危機により、アメリカの相対的地質は低下し、一国覇権主義は終
焉したかもしれない。しかし、今回の出来事が、アメリカに飛躍的な改革を
もたらすかもしれない。

金融危機が実態経済に影響を及ぼし始めると、設備投資が停滞、個人消費も
大きく落ち込むことになる。資源を持たない日本は、加工貿易だけでは難し
くなるだろう。世界経済の変化をどのように自国の成長に変えるかを考える
時だ。

レジュメやメモを見ながら、先生のお話を要約してみたが、先生の厳しさが、
自分の理解不足も相俟って十分に表現できなかったような気がする。